

テコア会と私

私はテコア会20周年と40周年に、それぞれ「聖書と私」「無教会と私」（のちに「無教会-私の場合」『無教会』第3号所収）と題して小文を寄せた。そこで今回の50周年に当たっては、表記の題をもってテコア会を、自分史的にとでもいう形で、振り返ってみたいと思う。

1. 教会か、キリスト教か

テコア会50周年に当たって、私は当番日の2006年7月2日と9月3日の2回の日曜集会において、山本泰次郎先生のテコア聖書集会開講講演「キリスト教はどのようにして始まったか」（1956年9月2日、武藤陽一筆記・孔版印刷、のちに『キリスト教の第一日』として牧歌社より出版、59年）を講読、解説した。私なりの記念と感謝のしるしであつた。

これまでに何度となく読んだが、読めば読む程この講演は衝撃的である。いつもそうであるように、ここでも先生の物事のとらえ方が^{ラディカル}根元的であるからだろう。先生は「まえおき」として開口一番「教会か、キリスト教か」と問い、以下のように言われる。「問題は結局二つであります。一つは教会という問題、もう一つはキリスト教という問題であります。キリスト教という言葉はむしろキリストと言ったほうがよいのですが、かりにキリスト教と申します。問題はこの二つに分かれます。教会の問題に専念するか、それとも教会の問題を忘れて、あるいはすてて、キリスト教に専念するか。私どもの信仰にはこの二つの行きかたがあるだけです。これ以外にはまず問題はありません。

これがキリスト教の問題でありまして、キリスト教始まって以来の問題であると思います。」

そして先生は自らこれに答えて、「教会の問題を忘れて、あるいはすてて」、「キリスト教に専念する」ことの重要性（恵み）を諄々と、かつ切々と説かれるのである。

「教会、無教会以前にもっと重大な問題があるのです。私どもの贖罪の問題、聖霊の問題、愛の問題、永遠の生命の問題、その問題をまず解決しない限り、私どもの本当の救いは有り得ないと思います」「キリストの生命に生きる問題こそ根本の問題で、この問題を解決いたしますれば、あと（教会）の問題は自然に、誰にでも、解決しようと思えばできますし、別に解決しなくともすむのであります。」

しかも先生は、さらに進んで次のような洞察と同情に満ちた言葉を添えられる。

「教会、無教会以前の問題だけで生きていくことは、これはなかなか困難なことであります。もし私どもが選ばれてそういう立場に立たされ、そういう生きかたをしなければならぬような信仰を与えられましたならば、私どもは本当に感謝してよろしいのであります。私もそういう信仰を与えられて、今日までとにも角にもやって来たことを感謝しております。」

そうして以下のように「まえおき」を結ばれる。「この道は困難の多い、歩くに決してやさしい道ではありません。しかしながら、歩き甲斐のある、生き甲斐のある道であります。今後皆様が二十年三十年此の道をお歩きになってごらんになれば、たぶん私が今日申しあげたことをご諒解願える

と思うのであります。」

(このあと先生は、使徒言行録2章をテキストに、五旬節の出来事を逐一講解されたが、ここでは一切省略する。)

いま「テコア聖書集会」50年を顧みて、私はまず、この開講講演をして下さった山本先生に対して、「先生、私どもくともにも角にも><此の道を歩いて>まいりました。先生の言われた通り、此の道こそが<生き甲斐のある道>であると<諒解>し、感謝と喜びに溢れています」と、報告申しあげたい。

もちろん、<此の道が困難の多い、歩くに決してやさしい道でない>ことは、私どもがよく<諒解>したところであった。私どもはしばしば躓き、倒れ、あるいは横道にそれ、しっかり歩いたとは到底言い難い。その道の跡はみすぼらしく、50年も歩いたという跡を示すべき何ものもない。しかし、ただ主の信実と恵みによって、<くともにも角にも><教会の問題をすてて>とまでいかずとも<忘れて>、「キリスト教に専念する」集まりを続けてきたことは確かである。何はなくとも、それだけはあった、いや、非力非才の私どもにはそれ以外に道はなかった、と言うべきであろう。だからこそ、私どもは「教会の問題」もろもろに煩わされること少なく、集まれば、語り合えば、行動する折あれば、常に「キリスト教の問題」のみでやってくることができたのである。幸いなことであった。

(なお付言すれば、山本先生の「教会か、キリスト教か」という問いは、いまの私(そして恐らく多くの友人たち)の問題意識では、むしろ「キリスト教か、福音か」

と言いかえた方がわかりやすいかも知れない。)

個人的には、とくに後半の20年間、友人たちの聖書講話を聴くことができ、実に多くのことを学び、福音の慰めと信仰の励ましを頒ち与えられてきたこと、そして50年の間に「出会った」多くのテコア教友たちの、とりわけ「教会」離脱以来の最も古い同志である(97歳にしてなおかくしゃくたる)奥平富士子さんの、主に在るご厚誼に対して、心から感謝申し上げます。

〔付〕伝道と集会

宋 斗用

伝道は決して集会を持つとか雑誌を出すことだけではない。まことの伝道は先ず自分自身が信じることである。本当に信じることである。イエス様を神の子として、そしてキリスト(救世主)として信じることである。この世がどうなろうと、誰が何と言おうと、そんなことは少しも気にせず、ただ信じるだけのことである。そうして「来て見よ」とイエス様を指さすだけである。

私が望むのは、私がイエス様を正しく指さすことができ、また人がそれを正しく見て正しく信じ、救われることを信じることのみである。これだけが私の切なる願いであり、私の最も大事な使命である。そうすることのために聖書を読み、お祈りをし、そして集会をする。しかしその他のことのために、すなわち知識のために聖書を読まず、自己満足や恍惚的神秘境に耽溺するために祈らず、また人間本位すなわち社交のために集まりはしない。

それゆえ私は学者的立場で聖書の研究に

打ち込まず、ただそこから「永遠の生命」を探究する。また病気を治し祝福をいただくためにだけ祈りをせず、それよりも神の御意に従ってまず告白し悔い改め、毎日誘惑に陥らないようにと祈り、決してわが意のごとくならず、父の御心に従って為すべき事を喜びと感謝で果たすことができるように願う。ましてや集会は決して人間を喜ばせるために、または人間の意志に従ってせず、ただ神を賛美し、その方だけを喜び、その方だけに栄光を帰すため、それだけを願う者たちと共に賛美と祈りと感謝を捧げるために、席を共にするのである。

このようにしているうちに、聖書の知識を得ることにもなり、祈りの中に聖霊のお働き、すなわち奇蹟もあるようになるし、集会で愛を学び、その愛を实践することにもなるのである。このようにして神の御心を成すエクレスシアが成立するのである。

(曹亨均訳、『聖書信愛』第146号(70・7)校正刷より抄出、表題は武藤、筆者は内村に直接師事した韓国無教会の伝道者(故人)、近く「信仰文集」刊行の予定、校正従事時の深い感銘をお頒ちしたくて紹介します。)

2. 「テコア通信」について

「テコア聖書集会」の正式の発足は、1956年9月2日であったが、「テコア会」という通称は既にそれ以前から使われ始めていた。「テコア」は言うまでもなく預言者アモスの出身地だが、私はその「アモス書」の講解を始めて(同年2月5日)間もなく「馬橋キリストの教会」を出なければ

ならなくなった(4月末日)。しかし、その勉強は仮の会場を転々としながら続けられ7月8日に終了したのであった。

秋の山本先生をお迎えしての開講に向けて、10名足らずの同志友人たちへの連絡のための手紙に、私は「テコアの丘から」と名付けたのが「通信」のそもそもの始まりで、第1号は7月23日付、第6号から「テコア通信」となった。

この「通信」は、こういうわけで全く私個人の、いわばごく内輪の友人たちに対する私信であったが、次第に「テコア聖書集会」の会誌の性格を帯びるようになった、と言ってよいだろう。と言って、集会での聖書講義を掲載するでも、集会の報告・連絡があるでもなく、定期発行ともいかなかった。何よりガリ版刷りの手書きで読みにくく、いかにも素人くさかった。内容的には、1980年代前半あたりが最も充実していたのではないかと思うが、144号(84年12月)で休刊となった。

その後、テコア会は30周年を機に私の個人的集会から会員全体で集会運営の責任を担っていこうとする新しい体制に変わった。以後「テコア通信」は一層個人的色彩が濃くなり、発行もほぼ一年に一回、ただし一応印刷で、88年3月から99年6月まで10号を出して、事実上終刊となった。

別して刊行の意図、目的があったわけでもなく、浅学非才の人間の稚拙な文章ではあったが、折々に感じたこと、考えたこと、学んだことを、テコア会で話したことも含めて、率直に執筆、発表することができた。

その内容は、聖書講話と信仰所感文を別にすれば、教会と無教会、日本(人・文化)と天皇(制)、戦争と平和(主義)、憲法

(論)と死刑(廃止論)、人生論など多岐にわたるが、いずれも「内面への視座と歴史への視座とが切り結ぶ原点(イエスの十字架)」(月本昭男『悲哀をこえて』)を追求、指向した論稿で、私の信仰告白と言うべきものであったと思っている。

なお、そこに記載した「平和」に関する論稿7編に、1988年から2年にわたって本人訴訟で提起した「良心的軍事費拒否」裁判の記録を合わせて、一書を上梓した(『平和への道すじーキリスト教平和主義の一証言』キリスト教図書出版社、'97年)。

3. 「無教会」の交わりの中で

「無教会と私」の文中で既に述べたことだが、私は「教会を出て無教会に入る、などとは考えたこともなかった」。ほぼ十年余り全く独りでいたが、やがて「多くの無教会の友人たちが『一致のしるしとして(私に)右手を差し出して』(ガラテヤ二・9)くれて、私は次第に無教会の共同体の中で生きるようになった」。

私は個人的には、内村鑑三は自ら「無教会」という一派をなすなど考えたこともなかったと思うし、だからこそ無教会(主義)のキリスト教に生きる時、人は「無教会」という群に加わるべきだなどとは決して思わない。しかし、無教会の信仰に生きる多くの人々が「無教会」という共同体を形成しているという歴史的現実を否定し得べくもない。私はいまそこに連なっていることを甚だ貴重な、有難いことだと思っている。そのことが私を謙遜にするし、他方私に日本における福音宣教の働きに参画している責任を自覚させてくれるからである。

以下は、それらの働きへの私の個人的参加の報告である。その内容については、テコア会において話したり、「テコア通信」に書いたりしたものもあるが、そうでないものもあるので、記録という意味で題目のみを記しておく。

(1)「キリスト教夜間(のちに、基礎)講座」「無教会研修所」「聖書語学通信講座」

先述した私に右手を差し伸べてくれた友人たちの代表は、これらの講座の世話人たちであった。私は彼らの愛に引っ張り出されて自らそこで学ぶと同時に、そこで教えるようになった。

「キリスト教夜間講座」は、「無教会にも共同で勉強する機会がほしい」という願いをもって1966年4月に発足した。私は聴講生を経て、71年度に「新約学」というゼミナールを担当したのを皮切りに、同講座が「基礎講座」となり、さらに発展的解消を遂げて「無教会研修所」(92年4月開所)となってからも、休んだ年度もあるが、ほぼ一貫して講師として関わり、結局2005年度末まで35年に及んだ。担当したのは、「新約聖書概論」「新約聖書原典講読」「新約ギリシア語文法」「特別講義」(内村に関する講義や地方出張夏期講座など)であった。

またこれと並行して、73年度に「聖書語学通信講座」が開講されたが、私はこれにもギリシア語担当の講師として参加し、添削指導とともに、夏期面接授業でも「文法」と「原典講読」を担当した。この講座は2002年3月をもって閉講となったが、私は途中から事務局の責任も担い、その為もあって、実に多様の聴講生(教会・

無教会、カトリック・プロテスタントを問わず)に出会うことができたことを、特に感謝している。

(2) 「内村鑑三記念講演会」

内村の逝去の年に始まったこの講演会は、何年かの例外を除けば、戦前戦後を通じて殆ど休みなく毎年開催されて今日に至っている。私は1994年3月、東京鴎友学園講堂において次の講演を行った。「内村鑑三の霊性」(『内村鑑三研究』第31号所収)

この講演会は戦後地方においても行われるようになった。私は大阪で91年「英語から見た内村鑑三」、2001年「<真の宗教>と<新文明>」の二講演を行った(いずれも『森の宮通信』第219,220,221,352,353号所収)。沖縄では89年に「内村鑑三における平民の思想」と題して講演した(『からしだね』第52号所収)。

これはいわゆる内村記念ではないが、94年10月に「札幌独立キリスト教会」の創立記念講演会に招かれ、「この最後の者にも一独立的キリスト教」と題して講演した(『独立教報』第211号所収)。

(3) 「無教会全国集会」

この集会が1987年11月に東京で初めて開かれた時、私は賛同者の一人となった。その責任を感じて、私は出来るだけ毎回参加するように努めてきた。年1回大たい秋に、ほぼ東京と地方とで交互に開催され、個人の自由参加である。私はこれまでに、司会などは別として、次の2回発言の機会を得た。96年のシンポジウムのパネラーとして「全国集会10年の評価と反省」、

99年の聖書講義担当者として「形なきキリスト教のあり方—ヨハネ福音書と無教会」(いずれも、同年の『記録』所収)。

これは私の個人的な認識だが、20年になる会の歴史の前半は、無教会の本質とそのあり方の追求が主要な目的であったのに対して、後半は次第に「無教会」の信徒交流集会の趣を呈しつつあると言えよう。

(4) 「今井館日曜聖書講義」「今井館伝道聖書集会」

いずれも今井館聖書講堂を会場として行われる聖書研究会である。

「日曜聖書講義」は、1992年5月、4人の世話人によって始められ、諸般の事情により10年存続して終了した。私は世話人代表清永昭次氏(故人)の厚誼によって5度出講し、各3回ずつの次の講義を行った。

94年「世界最大の書・聖書」(『聖書は語る』創刊号所収)

97年「宗教とは何か」(『同』第2号)

99年「アモス書を読む」

2001年「ペトロの手紙一を読む」

03年「霊と魂と体—聖書の人間観」

「伝道聖書集会」は、73年に発足して今なお続けられている会員制の集会で、第2、第4日曜日の午後に行われる。私は責任者である友人岡野行雄氏の親切な招きに応じて、次のような話をした。

75年「山上の垂訓」(4回)

88年「内村鑑三の異教精神」(『からしだね』第48号所収)

93年「内村鑑三の今日的意味」

「イエスのたとえ話に学ぶ」(6回)

「無教会論」(シンポジウム発題)

2002年「野村実先生とシュバイツァー」

(5) その他

「無教会史講座」（1977年発足、88年解散）という講座があった。その中で人物を取りあげた研究発表があり、私はテコア会に深い関わりのある次の二人を担当した。「長谷川周治」（78年）、「山本泰次郎—十字架の福音の唱道と聖書講義に徹した独立文書伝道者」（85年）である。

前者はのちに「長谷川周治—平和に生きた前垂れがけの武士」として『無教会キリスト教信仰を生きた人々』（新地書房、84年）に収録され、後者は全く新しい書き下ろしたとなったが、のちに『無教会史・Ⅱ、同Ⅲ』に「独立伝道者8 山本泰次郎」として掲載された。因にこの『無教会史』

（Ⅰ～Ⅳ、新教出版社、91～02年）は現時点における最も包括的な「無教会」の歴史書だろう。

近年のことになるが、2002年と05年に台湾と韓国を訪問する機会を得た。台湾では、「台日キリスト者の会」訪台交流会でのシンポジウム「台湾に生きるキリスト者、日本に生きるキリスト者」において、主題に添った発題をした（同会『会報』第12号所載）。韓国では「韓国無教会夏期集会」において、「無教会の信仰とキリスト教平和主義—日本人無教会信徒の歩み」

（『清瀬通信』第301号所載）と題して講演した。いずれも、テコア会と共に歩んだ私の50年にわたる信仰遍歴を振り返る良い折となった、と思っている。

序でながら、私は東京YMCA英語学校で30年余り聖書クラスを担当する機会を

与えられたが、その一つ「英語聖書セミナー」は私の退職（1996年3月）後も聴講者の自主的運営によって継続され、現在も月一回集まって聖書を読んでいる。

最後に、次の二群の共編者も記録に留めておきたい。内村鑑三『統一日一生』（教文館、64年）、教文館版『内村鑑三全集・総索引巻』（同、66年）、『内村鑑三英文著作全集』全7巻（同、73年）、山本泰次郎『山本泰次郎聖書講義双書』全17巻（キリスト教図書出版社、83年）。

（07・2・25記）

（所載）

『テコア聖書集会 50周年記念文集』

（テコア聖書集会、2007年7月）